

枕草子まくらのそうし

清少納言せいしょうなごん

奈良時代
710 平城京遷都 <small>せんと</small>
712 『古事記』
720 『日本書紀』
759 『万葉集』最後の歌
平安時代
794 平安京遷都
9c後半～10c初め『竹取物語』
905 『古今和歌集』 <small>こきん</small>
1000頃 『枕草子』 <small>ごろ</small>
1008頃 『源氏物語』
12c 『今昔物語集』 <small>こんじゃく</small>
1185 平家滅亡 <small>めつぼう</small>
鎌倉時代 <small>かまくら</small>
1205 『新古今和歌集』

枕草子 平安時代の中頃に、定子ていし（一条天皇いちじょうてんのうの中宮ちゅうぐう）に仕えた清

少納言せうなごんによって書かれた随筆ずいひつ。宮廷きゅうていでの生活、季節の感想や人

生についての考えなどが、三百ほどの章段に描えがかれている。

## 【参考】

『源氏物語』の「絵合」<sup>えあわせ</sup>の巻では、『竹取物語』を「物語のいできはじめの親」と述べています。

まづ、物語のいできはじめの親なる竹取の翁<sup>おきな</sup>に宇津保の俊蔭<sup>うつほ</sup>を合はせて争ふ。

まず初めに、左方は、最初に作られた物語である竹取の翁の物語に、右方は、宇津保の俊蔭の物語を合わせて勝負を争うことになる。

\* 絵合 左右の二組に分かれて、互<sup>たが</sup>いに持ち寄った絵を出し合い、その優劣<sup>ゆうれつ</sup>を競う遊び。

\* 宇津保の俊蔭 平安時代中期の物語『宇津保物語』の「俊蔭」の巻。遣唐使<sup>けんとうし</sup>の清原俊蔭<sup>としかげ</sup>が唐へ渡る途中で波斯国<sup>はし</sup>（ペルシヤ）に漂着<sup>ひょうちやく</sup>し、阿修羅<sup>あしゅら</sup>に出会い秘曲<sup>れいきん</sup>と霊琴<sup>れいきん</sup>を授けられて帰国する。